

相互学習型活動における 日本語非母語話者と母語話者の共生化の過程 —教育現場のエスノメソドロジ的会話分析から—

杉原 由美

学位取得年月：平成 21 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】相互行為、言語的共生化の葛藤的展開、非母語話者と母語話者の関係性の転換、協働
【要旨】

グローバル化による日本社会の多言語多文化顕在化に伴い、国内の日本語教育では 1990 年代半ばから「共生をテーマとするパラダイムシフト」が起きていると指摘されている。このような中、地域日本語教育と大学の日本事情教育を中心に、「非母語話者と母語話者が参加して、対等な立場でやりとりを行い、共生に向けて日本語と相互理解を学習する活動」が行われるようになった。このような活動を本研究では「相互学習型活動」と呼び、その問題点として、①新しい実践であるがゆえに、共生を目指してどのような学習を期待するのかという「学習のあり方」の検討が不十分であるという点、②活動中に交わされる日本語会話の中で、非母語話者と母語話者の関係性に問題が生じている点に、注目した。そして、相互学習型活動の会話に現れる非母語話者と母語話者の関係性の観察から両者の「共生化の過程」を明らかにし、その結果を踏まえて相互学習型活動のあり方を検討して、活動デザインへの示唆を得るための研究を行った。

研究の枠組みは、相互学習型活動中の日本語会話を、教育現場の精緻な観察を行って実践上の課題を探るためにエスノメソドロジ的会話分析の方法論を用いて記述して、非母語話者と母語話者の「言語的共生化の過程」の観点を軸とする理論的枠組みから解釈し検討するというものである。本研究では、社会変動による困難な状況での言語話者の生態の保全と育成を目指す「言語生態学」を背景とする「言語的共生化の過程」の内容を詳しく吟味して、非母語話者と母語話者の交渉過程には「異なりが対立する」現象が生起し、その「対立関係を組み替える」ことによって「異なりが内在的に統合」される「共生化の葛藤的展開」が起こる、という本研究独自の視点を加えて理論的枠組みを構成した。

以上のような枠組みで、3つの研究を行った。

研究 1 では、地域住民を対象とした相互学習型活動の相互行為について、非母語話者と母語話者の非対称的な関係性と、その転換がどのように生起するのかを探った。そして、「〇〇（国）ではどうですか」と「××（日本語の単語）って分かりますか」という 2つの質問応答連鎖が繰り返し浮上して「日本人／外国人」という参加者間の関係性を構築することに注目し、共生化の契機となる「自己保存」の過程として検討した。

研究 2 と 3 では、大学の授業での相互学習型活動を対象とした研究を行った。研究 2 では、「母語話者が話し合いの枠組みや展開を方向づける発話をする」という相互行為のパターンが複数の事例で繰り返し現れて「母語話者／非母語話者」という関係性を構築することに注目した。そして、母語話者と非母語話者の非対称的な関係性と力の行使がみられた相互行為において、いかにして異質性が排除されるのか詳しく解明した。研究 3 では、非母語話者と母語話者の非対称的な関係が転換していると解釈された場面に注目した。そして、日本のやり方が無意識的に優先されていることに対して非母語話者が異議を申し立て、母語話者とぶつかりあって成員カテゴリー化の交渉がされ境界線の引き直しが起こった相互行為から、「異なりの内在的統合」に向かう「協働」行動について詳しく解明した。

以上の 3つの研究結果を総合的に考察して、相互学習型活動における言語的共生化の葛藤的展開について明らかにした。その上で、相互学習型活動の学習とは、非母語話者と母語話者の異質性が対立する居心地の悪さを逃げずに受け止め、双方の協働によってその対立を組み替えていくという困難な営みを経験することと捉えられた。そして、このような学習を支えるために、具体的な活動デザインへの示唆と提言を示した。

(すぎはら ゆみ)